

つ三いろきたるは十五づゝあるは六づゝ七づゝ多くきたるは十八廿にてぞ有けるこのいろ
いろをきかはしつゝなみわたるなりけりあるはからあやをきたるもありあるはおりもんか
たもんうきもんなどいろくゝにまたがひつゝぞきためるうはぎはいつへなどにまたりある
は柳などのひとへはみなうちたるもあめりから衣どもの色みなまたこのおなじ色どもをと
りかはしつゝきたり裳はみなおほうみなり○中殿ばらあさましうめもあやにてかたみに御
めをみかはしあきたまへり略 ○中おまへにはひんがしのらうのまへのかたにやゝにしにい
で、がく人ども、候おまへのひたきやのものと梅の人まげきはひの風にちりくるかほり
もめでたし、れいのさほうの樂人四人づゝいきて萬歲樂太平樂などまふほど、いみじうおもし
ろし、がくのおとなどもをりからにや、すぐれてめでたう聞えたり、樂人ども、おまへのかたのみ
すぎはをうちまぼり、樂あぐる心ちも興ありて、物のねいとおもしろし、小野宮のおとゝ、關白殿
にさしまりきこえ給て、おもしろき事ども、めでたき事ども、いまでも年へぬる人はおのづから見
る物也、いざけふの女房のなりのやうなる事こそまだ見はべらね、たゝかゝる事は、あさましう
けしからずぞありけるなど申給へば、關白殿うちほゝゝるませ給ふほど、みすの内には何事な
らんとすゝろはしう思ふべし、一日の關白どのゝ、大饗をぞとのゝありさまよりはじめ、えもい
はずめでたしと思ひしに、かれはやみの夜なりけり、けふはあきらかなるかゝみにさしむかひ
たる心ちしてこそは、わがはづかしければ、さやうにこそはおぼえ侍れ○中まづけふは、よろづ
のことのあまりいたうつくろはるゝに、いとわびしやなどの給も、いとさまゝをかし、○中日
のくるゝ程に、所々のはしら松どもに、またてごとにもしたるひかりどもなどの、ひると見ゆ
るに、○中殿ばらいまは御あそびになりて、いみじうをかしきに、夜にいりたりものゝ、ねども心
ことなり、御かはらけに、花か雪かのちりいりたるに、中宮大夫うち誦し給、梅花帶雪飛琴上、柳色